

48

ハンセン病医学者・菅井竹吉の履歴、 特に東京市養育院時代の事績について

平井雄一郎

渋沢研究会

報告者は、本誌第55巻4号に原著「光田健輔と『回春病室』という記憶」を掲載し、その中で明治期東京市養育院における「医員」制度の解説を試みたが、同稿を最初に投稿した際の査読所見において、医員第1号の菅井竹吉の履歴の誤りを指摘された。それがきっかけとなって、菅井の履歴をあらためて詳細に調査することとなった。以下、(未だ不完全ではあるが)その調査報告として、没後評伝の類は一切著されず、また各種人名辞典にもその名をまったく見出すことのできないこの医学者の履歴を紹介し、とりわけ東京市養育院時代の事績について着目してみたい。

菅井は1871(明治4)年12月、京都府何鹿郡山家村の商家に生まれ、1888年に上京、翌年まず薬剤師試験に合格。さらに私立済生学舎で2年学び、医術開業試験後期に合格、弱冠20歳、1891年12月付で医師登録された。東京市内、富山、大阪の病院で経験を積んだのち、1897年に再び上京、帝大医科大学の病理学・山極勝三郎教室の選科生となり、1898年に大学から東京市養育院医局に派遣、1901年6月には養育院専属「医員」の初採用者となった(山極教室→養育院というコースは同時期の光田健輔と重なる)。養育院では医長・入澤達吉の薫陶を受け、入澤門下生の一人として数えられることとなる。養育院退職(1904年2月)の翌年、大阪府立高等医学校に教諭として赴任。そして同校校長の佐多愛彦が土地選定に働いていた関係で1909年4月、最初の公立ハンセン病療養所の一つ、第3区外島保養院の初代医長に推挙されたのである。保養院は健康上の理由から1922年7月に退職したが、この間、医学校教諭は兼任、また1910年には癩の血清療法に関する論文で博士号を取得した。これは当時の学士ではないいわゆる「試験医師」としては異例なことである。外島を去って以降は、大阪天王寺で開業していたが、健康に優れなかったために目立った活動はなく、1944年2月、医学校の後身である阪大病院にて没した。

菅井が歴史上に辛うじて名を残しているのは、おそらく保養院医長としての言動によってのみであり、管見のかぎり、それ以外の場における事績が顧みられることはほとんどない。しかしハンセン病医学者の軌跡としてその生涯を辿り直してみた場合、養育院時代の学究活動を見過ごすことはけっしてできない。養育院医員としての菅井はさまざまな疾患の入院者の臨床を使用して、原著論文執筆、および学会における演題報告・討論を多数行っており、とりあえず前者では「癩」にかんするものを8本確認できた(『東京医学会雑誌』、『皮膚科及泌尿器科雑誌』)。長文にわたるものを分載したり、またまったく同内容のものを二つの雑誌に重複掲載したりしているので、実質的には3本(1本は菅井が「畏友」と呼ぶ光田との共著)であるが、そのテーマは、①末梢神経と血管における病変、②人体から採取した結節に対する動物の感受性、③結節癩における化膿性炎症、である。これらのうち②は光田でさえもまったく着手していなかった分野であり、菅井は、モルモット・南京鼠・ラット・猿・犬・猫・家鼠について感受性実験を行ったところ、南京鼠については良好の成績を得たが、しかし一般的に動物の感受性は人間に比較すれば弱い、と観察結果を述べている。なお菅井が診察した患者達の中にはのちに荏原郡目黒村の私立慰廃園へ委託(1904年7月)された者の名前も見え、したがって同委託事案の処理を当初、直接担当したのは菅井であった可能性も考えられる。

このように菅井の「癩」にかかわる業績は養育院時代から顕著である。したがって、養育院におけるハンセン病患者医療は光田によって「独占」されていた、などというのは、誤った俗説、後世の創られた「神話」として斥けられねばならないだろう。